

今月は、内牧に絶筆を残した歌人、不旱と、狩尾出身の俳人、吉良蘇月の碑をご紹介します。



隼鷹天満宮境内の歌碑



内牧黒川河畔文学碑公園の歌碑

歌碑 宗 不旱

「隼鷹の宮居の神はやぶ中の

いしのかけておはしけるかも」

歌碑所在地 的 隼鷹天満宮境内

* 自筆

* 昭和63年阿蘇郷土の会建立

この歌は、昭和14年、友人の筑紫岳川（本名祐夫。内牧）の案内での石のお茶屋跡を訪ねた際詠まれた歌です。詞書に「筑紫岳川の案内にて的の石村の小糸氏を訪ふ、その林泉の美に歌を得ず、庭の奥なる隼鷹の宮にてよめる」とあります。

「内之牧朝闇いでて湯にかよふ

道のべに聞く田蛙のこゑ」

歌碑所在地 内牧黒川河畔文学碑公園（道智寺の南側）

* 自筆

* 昭和61年阿蘇郷土の会建立

この歌も昭和14年に発表された歌ですが、昭和17年に内牧の達磨旅館に宿泊した時に、この歌と杜甫の「相对如梦寐」という漢詩を書いています。この旅館を発つた後、不旱は鞍岳山中で消息を絶っており、この二書が絶筆となりました（この自筆の二首は、内牧に在住の旅館の身内の方が大事に保管されています。）



吉良善平翁顕彰碑（句はこの碑の裏にあります）

句碑 吉良 蘇月

「雪の中芽麦見給ふ野の仏」

句碑所在地 狩尾 吉良家屋敷

* 昭和49年建立された吉良善平翁顕彰碑（蘇月の祖父）の碑陰に刻まれています。

の碑陰に刻まれています。

「石路の絮いつ離るゝや枯れて立つ」

句碑所在地 吉良家墓地

* 昭和39年建立。吉良家の墓石に刻まれた句です。

「「ほろぎや明治の騒動

鳴き継ぐも」

歌碑所在地 吉良家屋敷

* 昭和42年阿蘇郷土の会建立

明治10年、薩軍と官軍で戦われた西南の役のあおりで阿蘇一揆が起こり吉良家も打ち壊しの被害に遭いました。阿蘇谷だけで、64戸の地主の家が壊されたといわれています。

蘇月は、この一揆を顧み俳句にし、昭和42年銅版に刻み、家の大黒柱にはめ込みました。裏には一揆の一部始終が書かれており、当時の様子を偲ぶことができます。

宗 不旱（1884～1942）

歌人。熊本市生まれ。熊本医学校中退。中国、台湾などを10余年放浪し、その間、短歌の他、硯を作る技術も身につけ硯工不旱と称されるほどです。また、この時期に杜甫の漢詩に感銘を受け晩年まで好んでいます。

不旱の歌風は万葉調で格調高く独自の歌境が見られます。現在も熊本が生んだ歌人として親しまれ、県内各地に句碑が建立されています。歌集の中には「内の牧散歩」「初冬の阿蘇」など、本市のことを詠んだ歌も数多くあります。

吉良蘇月（1908～1992）

歯科医師。俳人。狩尾生まれ。本名は憲夫。尾ヶ石東部小学校、熊本市鎮西中、日本大学歯科医学校を卒業後、昭和7年に埼玉県飯能市に歯科医院を開業。昭和21年、飯能文化協会を創立。同年、馬酔木に入門。むさし野俳句会を主宰し、飯能市俳句連盟会長を務めるなど地域の俳句指導にも貢献しています。

阿蘇市出身の詩人、蔵原伸二郎や、版画家の棟方志功と親交があります。